『写真花嫁』に見る日系アメリカ人一世の生き方について

The life of Issei in "Picture Bride"

山　本　茂　美

Shigemi YAMAMOTO

はじめに

日系アメリカ文学の研究をするにあたり，我々が必ず直面するのは，日系１世の苦難な過去の歴史と，１世２世を中心にした第２次世界大戦中の強制収容所の問題である。これらをテーマにした作品は数多く見られる。[1)]

そこで今回は，その２つの中から日系１世の歴史，とりわけ「写真花嫁」をテーマにした作品について考察していきたい。「写真花嫁」は，日系１世の男性が，アメリカに定住することを決意した時に考えられたお見合いの１つであるが，多くの，日本からアメリカに渡った女性に悲劇をもたらし，さらにこの事がアメリカ社会，特に西部で排日運動を加速することになるのである。

１　「写真花嫁」とは

そこで，まず「写真花嫁」の実態から話を進めていきたい。日系１世の男性は当初アメリカに渡り大金を持って日本に帰ることが目標であった。[2)] しかし，ハワイでも，アメリカ本土でも，日本で聞かされていた状況とは全く異なり，そのアメリカでの生活は悲惨なものであった。農作業をするために日本から運んだ苗や木々はことごとく枯れ，まゆはすべて死んでいった。どうやって日々の生活を過ごせばいいか途方にくれた彼らは，ただ惨めな生活を過ごしていく。しかし，彼らはわずかな給料を貯め，日本から花嫁を迎え，アメリカの地で家庭を築く道を選び始める。

日本人がアメリカに渡ったのは中国人労働者に代わる労働力を日本人に求めたことがきっかけであった。しかし，白人社会に同化せず，日本文化に固執する日本人は，やがて白人を中心とするアメリカ人にとって目障りな存在になってきた。

1907年から1908年にかけて日本とアメリカ合衆国によって合意し，1908年に成立した「紳士協定（Gentlemen's Agreement）」によって，日本人がアメリカに渡ることは禁止された。しかし，アメリカに居住する男性の結婚相手として迎える花嫁だけは移民が許されたのである。その後急激に日本から花嫁がアメリカに渡ることになる。だが移民した日本人男性の大半は花嫁を探すために日本に戻る金銭的な余裕はほとんどなかった。そこで考えられたのが，「写真結婚」である。

当時，日本においても写真を交換し，ほとんど相手に会わずに結婚することは決して珍しいものではなかった。そこでアメリカに渡っ

た男性は，自分の写真を日本の親族に送り，結婚相手を求めることになった。適当な相手が見つかると，女性の写真をアメリカの男性に送る。男性はその相手に手紙を出し，お互いに意思を確かめた後，女性の籍を男性の妻として男性の家の戸籍に入れる。そして，夫となる男性なしに，日本で簡単な結婚式を挙げる。その後，夫はアメリカの日本領事館に証明の発給申請をして，その証明を日本に送る。次に，女性はその証明書は地方庁へ持参し，旅券を発行してもらうのである。

しかし，当時売春を目的とした渡米も見られた事から，女性は6ヶ月たたないと渡航の許可が出なかった。その後，長い船旅をして，やっとの思いで夫のもとに渡るのである。さらにアメリカでは，移民局で法人キリスト教牧師の前で結婚式を挙げて，初めて正式な夫婦となった。だが，アメリカに渡り，長年過ごした為結婚の適齢期を過ぎた男性も多く，若い時の写真を送ったり，年齢をごまかしたり，更には別人の写真を送り，なんとか花嫁を探そうとする事態も起きていた。

決して日本人だけがこのような結婚をしたわけではないが，日本からの集団花嫁の姿は，アメリカ社会ではかなり不自然なものに見えた。さらに彼女たちは次々に子供を産んだこともあり，西海岸が黄色人種に占領されるという恐怖におそわれた。これが「黄禍論」である。

「写真花嫁」を選択した女性たちには，いくつかの理由がある。当時の日本の習慣から考えれば，親の勧めるままに，逆らうことなく縁談を受け入れるのは驚くことではなかったが，結婚を決意した理由や結婚に対する期待は個人によって違っている。

家庭が貧しいので嫁入り道具を揃えることができないことから「写真花嫁」を決めたものもいれば，再婚のため運をかけたものもいた。日本の昔からの家長制度を嫌い，嫁の義務から逃げることを期待したものもいる。しかし，最大の理由は，経済的にも文化的にも豊かな西洋の文明国，「アメリカ」に住むことに対して，憧れを抱いていたということであろう。このような様々な背景を持つ「写真花嫁」が，日系アメリカ文学の作品の中でいろいろな個性を持った人間として登場するのである。

2　写真花嫁が登場する作品について

日系3世デイビッド・ムラ（David Mura）の作品の中には日系1世の祖父母をテーマにした作品がある。[3] この中には何故祖父母がアメリカに渡ったかが書かれており，その中で登場する祖母は「写真花嫁」であったという。また日系2世ワカコ・ヤマウチ（Wakako Yamauchi）の両親は，静岡県静岡市の出身であるが，家業のかまぼこ屋を継ぎたくなかった父親が渡米し，その後貧困に苦しんでいた母が「写真花嫁」としてアメリカに渡ったのである。

ワカコ・ヤマウチの作品 *And The Soul Shall Dance* に登場する Emiko は Oka の後妻である。この Emiko は，日本でよくない男性と付き合い，小さな町でうわさが広がり，親がその相手と別れさせる手段として，ちょうど日本に残っていた姉が病死したこともあり，アメリカに渡っていた義兄の嫁としてアメリカに送られたのである。Emiko は完全な「写真花嫁」とはいえないかもしれないが，その後の生活は他の多くの「写真花嫁」と同様，愛情を持てない夫との生活に苦しみ，日本に戻る日ばかりを夢見ている。やがてその夢が破れたとき自殺してしまうのである。

フィリップ・カン・ゴタンダ（Philip Kan Gotand）の作品は，1世を中心とした登場人物のアメリカでの生活を描いたものである。

A Song For a Nisei Fisherman[4]の作品の中では，フィリップ・カン・ゴタンダの両親がモデルになっている。そこで，この作品の中で登場するイッタ・マツモトの両親も「写真花嫁」である事が推測されるが，はっきりした記述は無い。

このように，日系アメリカ文学の中で，「写真花嫁」の記述があまり見られないのは何故だろうか。「写真花嫁」は，日系アメリカ人の歴史の中で，決して光の部分ではない。排日運動を加速させた，この「写真結婚」という形をあえて文学作品の中に表現しないのは，日系人がこの行動に対してかなり批判を受け，それを改めて表面化したくないという現れであろう。

そこで筆者は，あえてこのテーマを題材にしたヨシコ・ウチダが書いた『写真花嫁』（*Picture Bride*）と，カヨ・ハッタ（Kayo Hatta）の作品『写真花嫁』（*Picture Bride*）という映画化までされた作品について5つの点から比較してみたい。まず⑴それぞれの作品の設定場所。⑵「写真花嫁」として渡米した理由。⑶夫の仕事。⑷作品の中の登場人物の年齢。⑸最後に物語の結末である。

3　2つの「写真花嫁」の作品の比較

筆者は，Yoshiko Uchidaが『荒野に追われた人々』（*The Excile Desert*）の訳者波多野氏と面識があったことからYoshiko Uchidaに強い興味を抱いていた。そこで，Yoshiko Uchidaの作品を翻訳を含め何冊か研究してきた。[5] Yoshiko Uchidaは，晩年児童文学作品を数々出版し，できるだけ多くの人々に，日系人が味わった苦しみを理解してもらい，今後このような悲劇がなくなるように活動を続けていた人物である。彼女の『写真花嫁』という作品は*The New York Public Library*による88年度10代児童書300選に選出された。

一方Kayo Hattaはハワイで活躍する脚本家であり監督である。彼女は映画という媒体を使って「写真花嫁」の問題を表現している。今回は映画に使われた，妹Mayo Hattaとの共著である本を参考に考察をしていきたい。

⑴　それぞれの作品の設定場所

Yoshiko Uchidaの『写真花嫁』の舞台はアメリカ本土カリフォルニアのオークランドである。アメリカ本土に渡った日系人は，農業に従事した者も多いが，大陸横断鉄道の仕事に従事するために渡ったものもいるし，勉強をしたり，キリスト教の親交のために渡った人もいた。そこでそのような人々のためにクリーニング屋や雑貨商を営むものもいた。ここでは主人公ハナの夫竹田太郎は，雑貨商を営んでいる。

ちなみにYoshiko Uchidaは，*Of Dry Goods and Black Bow Ties*という作品を書いている。この中の登場人物はYoshiko Uchidaの父の話を基にしている。主人公シマダは雑貨食料品店を経て，最盛期には不動産会社，郵便局などの仕事も手がけていた。『写真花嫁』の中の竹田太郎はこのシマダの人生とは異なり，決して1度も華やいだ時期を経験することは無かったが，商売としては，このときのシマダが重なっているとも考えられる。

竹田は雑貨商であったこともあり，ハナは肉体労働をするということはなかったが，今まで女中がやっていたメイドとしての仕事をすることとなる。

一方Kayo Hattaの作品の中では主人公リヨは，ハワイでサトウキビ畑のプランテーションで働くマツジの妻として渡米する。－この設定でもわかるようにハワイへの移民は大半が農業労働者であった。－

そこでリヨは厳しい労働条件の中で，農業労働者として働く運命となるのである。そして，なんとしても日本に戻りたいがために独身労働者の洗濯という，さらなる肉体労働も行うのである。

⑵ 「写真花嫁」を選んだ理由

Yoshiko Uchida の作品の中のハナは，大宮家という，かつては名声を馳せた由緒ある家柄の末っ子だった。父親は渡米する15年前に死んだが，かつては使用人や小作人を大勢かかえる村一番の地主であり，最後の武士だった。しかし今は財産と呼べるものは何も残っていなかった。ハナの姉３人は，それぞれ相当なところに嫁いで，暮らし向きはよかった。

ハナは21歳であったが，適当な相手を見つけることは，大宮家にとって大問題だった。アメリカで成功した金持ちの商人というイメージの太郎との縁談に対して，ハナも周りの親戚も期待を寄せ，結婚話はすすめられていくのである。

一方 Kayo Hatta の作品の中のリヨは，わずか16歳。４年間の第一次世界大戦後の1918年，リヨの父親は亡くなった。すでに母を亡くしていたリヨは身寄りが無く，貧しい生活と押し寄せる不安におそわれていた。

リヨは自分の過去の亡霊から逃げ出したいという激しい欲求にかられ，自分のことを誰も知らない土地で暮らしたいと思った。両親２人を結核で亡くしたリヨが，日本で生きていくことは，極めて困難であった。地域の人々からは距離を置かれ，結婚するチャンスはほとんどなかったのである。様々なうわさや差別に苦しんだリヨが，日本から逃げ出したいと考えるのも不思議なことではなかったのである。

このような二人の，「写真花嫁」になる動機は，1900年以降の写真花嫁の代表的なものであり，それぞれが史実を忠実に再現していると考えられる。

⑶ 夫の仕事

先にも述べたようにハナの夫は商人，ここでは日本の食料を中心とした雑貨商であった。ハナは農業に従事する夫のもとに嫁いだ写真花嫁に比べると，比較的暮らし向きが良かった。ハナの夫太郎は，医者の友人やキリスト教教会の牧師との交流をして，教養のある人々との共同社会に生きている。

又，日系人のみが生活する地域ではないところに家を借り，白人のデイビス夫妻の家のハウスメイドをしながら交流を進めていく。何より特徴的なことは，太郎やハナは毎週教会の礼拝に参加していることだ。このようなことを考えると，本土に渡った日本人の中では比較的上流社会に身を置く日系一世の生活を描いていることになる。

これも，Yoshiko Uchida が，キリスト教を信じる両親の元に育てられ医者となる為渡米し，日本の商社の現地社員として生活を支えた父の影響があるのではないかと考える。経済的に恵まれた Yoshiko Uchida の実生活の中で接した人々の一人をテーマにしたことも推測できるであろう。

一方リヨが渡ったハワイでは，砂糖きび畑の肉体労働者が主流なこともあり，大半は農家出身の写真花嫁であった。マツジの家は木造の小屋で，物置のような粗末なものであった。労働者を監視するルナという役のポルトガル人が，常に労働の命令をして休むことを許さない。くわを手にして大粒の汗を流して働くのである。

しかしマツジは決して文句を言わず，仲間の不満が爆発しそうになった時も，周りの人々をなだめ，また，黙黙と働くのである。わずかなお金で生活をして，そのわずかなお金を

貯めて，将来日本に戻るか，ホノルルに移動し，商売をすることを夢見る。このような最低水準の生活に身をおく姿を描写している。

⑷　作品中の登場人物の年齢設定

ハナは21歳で太郎は31歳であった。当時の日本の結婚を考えてみても，この年齢差は想定内のものである。それにもかかわらず，ハナが違和感を覚えたのは，太郎が年齢よりも老けて中年に見えたからである。それでは，何故作者はこのような条件を太郎につけたのであろうか？おそらくこれは，太郎がアメリカで人並み以上の苦労を重ねたことを象徴したかった為であろう。ハナの21才という年齢も，日本社会では当然結婚しても不思議ではない年齢である。そこで，ハナの太郎に対するイメージがあまりにも違っていたにもかかわらず，一応夫婦として生活をスタートさせるのである。しかし，ハナの若さは，ヤマカという太郎の知りあいの若者への恋心に火をつけ，精神的に深い感情を確かめあうことになる。最後まで，理性が先行するハナではあるが，インフルエンザでヤマカが死にかけていると聞き，身重の身でありながら，ヤマカの死に駆けつける。次の日には，ヤマカは亡くなるが，その数日後，ハナは，インフルエンザにかかる。熱は数日引かず，やっと治った後，階段から落ちて子どもを死産してしまう。心の中だけの恋愛とはいえ，太郎に対して裏切りの行動をしたことによって，二人の間にできた傷は深く，一生残ることになる。

メアリーという娘を授かり育てていく中で，お互いのぎくしゃくした愛を，すっかりメアリーにつぎ込んでいくが，作品全体の中で，より大人の気持ちで接するのはハナであり，太郎は，自分の気持ちのままに行動することが多く見られる。これも日系移民の男性としては比較的若い年齢設定のためかもしれない。

一方，リヨは16才。マツジは43才。自分の父親とほとんど歳の変わらないマツジが，自分をだまして若いころの写真を送ってきたことが，リヨには許せなかったのである。そこでリヨは同居人としての生活をするが，お金をためて日本に帰ることを決心する。小さな身体で，慣れない農業に従事し，更に洗濯という別の仕事もしながら，何とかお金をためようとするリヨ，そんな姿を寂しそうに見守るマツジであった。しかし，常に自分の妻としてそばでそっと見守り，帰りが遅くなったり，周りの人々からいじめられるような辛い場面に出会うと，すぐにかばってくれるのである。父を亡くしたばかりのリヨにとって，夫というよりは父親的な存在でしかないマツジに対して，次のような記述がある。「リヨは父親と変わらない歳のマツジに失望し，貧しい農民の生活にも驚きを感じていた。今となってはせめて懸命に働くことで，気持ちを紛らわすより他に方法は無い。１日１日黙々と働いて帰国の日を夢見るのみである。ただ，そんな彼女を追い出すでもなく家においているマツジの愛情が，リヨにもうっすらではあるが伝わっていた。」（Kayo Hatta，*Picture Bride 133*,以下 Kayo Hatta と略す）

自分のリヨに対する愛情をうまく伝えられないマツジではあったが，この物語の中で，少しずつそんな不器用な姿に，リヨは愛情を抱くようになっていくのであった。このように Kayo Hatta の物語の中では，見た目の条件にとらわれず，本当に大切なものは，優しい心であることを伝えている。そして傷ついた気持ちで過ごしていく16歳の少女は，やがて本当の愛情とはなにかに気づき，幸せになっていく姿を描いている。

⑸　物語の結末

Yoshiko Uchida の作品は第２次世界大戦

中の強制収容所での生活までを描いている。写真花嫁として渡米したハナは子どもの流産を2回経験した後，やっとメアリーという子どもを授かった。夫婦の仲にはヤナカという男性の存在がいつまでも尾を引き，100%信頼できる夫婦というわけには行かなかった。しかし，メアリーを可愛がるという共通の目標を持ち，表面的には穏やかな生活を続ける。そしてメアリーに対して，次のような描写がある。

> メアリーは，2世の子特有の育ちのよさがある，おとなしい子だ。学校ではよく勉強するので目立って成績が良い。ハナと太郎は，それほど意識はしていないにしても，メアリーが優秀だということを大切なことに感じていた。人種的プライドゆえに，劣った人種だと言われていることを跳ね返す力とする為に，2人はいつもメアリーにいい子で聞き分けよく素直であれ，と教えてきた。一生懸命勉強して法に従う市民となって，いつの日か白人アメリカ社会に溶け込んで受け入れてもらえるように，と。[6]（Yoshiko Uchida, *Pictre Bride*, 185, 以下 Yoshiko Uchida と略す）

やがて，メアリーが年頃になった時，ハナは2世としてすっかりアメリカ人になった娘に対して不安を感じる。彼女は次のように考える。

> 自分の娘に目をやって，もし今日日本に帰ったとしたらどういうことになるだろう，と想像してみた。メアリーを日本の女の子に育てるにはもう手遅れだろうか。メアリーが絹の着物を着てうやうやしくうなづき，お茶や生け花をやっている様子を描いてみた。真っ白な白粉を顔一面にぬり，和風の花嫁衣裳で派手に着飾った彼女。だが想像の中で，メアリーは，和風の衣装で締め付けられるのを嫌って，さっさと脱いでいる。そこでハナは娘は自由すぎるし自分の意思をはっきり持っているから従順な日本のお嫁さんに離れないと悟った。（Yoshiko Uchida, 196）

そしてその不安は，メアリーが駆け落ちするということで現実のものになる。それでもメアリーに子どもが産まれるとき，助けに行こうと考えるが，メアリーはそんな親の気持ちを感じられず，両親の愛情を拒否するのである。

さらに日本の真珠湾攻撃によって日系アメリカ人はすべて「敵国外国人」としてみなされ強制収容所に送られる事になる。自分たちは，アメリカに忠誠を尽くしてがんばってきたという1世の気持ちはひどく傷つけられることになる。スパイ容疑でモンタナ州収容所に送られたドクター金田は，日系社会のリーダーでもあった生き生きとした姿は跡形も無く，すっかり心を閉ざしていくのである。

太郎もやっとのことでメアリー名義で手に入れたお店を奪われ，ほとんど生きる望みを失っていく。ハナの友人であったキクの夫ヘンリーは，強制収容所に送られる前日に，日本人を嫌う1人の白人によって撃ち殺されてしまう。

Yoshiko Uchida の作品は，『写真花嫁』というタイトルではあるが，その内容は写真花嫁としてアメリカに渡った日系1世の生活を通じて数々おきた日系人の苦難を描こうとしていたのであろう。モンタナ州の収容所にはYoshiko Uchida の父親も一時送られていたのである。

物語の最後には，太郎が有刺鉄線に近づい

たという理由で，アメリカ兵に撃ち殺されてしまう。この時駆けつけたメアリーは，日系人としてのつながりを断ち切って自分がやったことの罪の重さを初めて知るのである。

……and yet she admired their dignity and strength even in so desolate a place. She grieved bitterly, consumed with guilt, because she knew she had not been the daughter Taro hoped she would be. (Yoshiko Uchida 214)

・・・こんな荒れ果てた場所に生活しながら，人間としての尊厳と強さを保っている彼らに感服した。彼女は父，太郎の期待に添えなかった娘としての意識に苦しみ耐えられない気持ちであった。」(Yoshiko Uchida, 317)

最後にキクと収容所で再会するハナはこれからも力を合わせて生きていこうと誓うのである。健二という，太郎とハナがとても大切に付き合ってきた青年の自分の妻への言葉はこのように結んでいる。

But Kenji told her not to worry." They're strong. Sumiko, both of them. They each crossed an ocean alone to come to this country,and they're going servive the future with the same strength and spirit.I know it." (215-216)

心配しなくていい，強いよ，あの２人は。１人で海を渡ってこの国にやってきた人たちだ。その強さとその元気でこれからも生きていけるさ。そうだよ。」(320)

一方 Kayo Hatta の作品では，ハワイに強制収容という措置がとられなかった事もあり，そこまでの時代の描写は無い。仲良しだった友人が，火事で焼け死に，ますます孤独に成っていく。１人で家を飛び出した時，マツジが追ってくる。マツジは，いつまでも自分を受け入れないのは，リヨに男性がいるからだと疑うのである。そこでリヨは，初めて自分の両親が結核で亡くなった事を告げるのである。マツジは，その事実に茫然とする。もし，そんなことを知っていたらマツジの両親は，リヨとの結婚を許さなかったからである。

その夜，マツジはリヨに一言も声をかけなかった。リヨは考えた。「両親が肺結核だったことを告白したとたんに，彼も態度を変えるのだろうか。リヨは日本にいた頃の心の傷が開いて，また血がどくどくと流れ出してくるような感覚に襲われた。あの病気さえなければ自分も人並みの扱いを受け，今頃は日本で普通の結婚をしていたはずである。」[7] (Kayo Hatta 181)

リヨはマツジが一言も口を開いてくれない事で，自分は家を出て行くべきだと決心する。一方マツジは小鳥がとうとう飛び立ってしまったと感じていた。心の傷を告白したリヨに，優しい言葉すらかけてやれなかったことを悔やみながらお酒を飲み続けた。あきらめかけた時，リヨは戻ってきた。マツジは初めて優しい言葉をかける。「お前を港で最初に見た時，色が白くてやせていて，とてもじゃないが１週間も持たないと思った。畑仕事なんか無理だと思っていた。でもお前は良くやった。本当にがんばった女の子だ。」(195)

こうしてやっと２人は心の通じ合う夫婦になったのである。物語の最後には，マツジがリヨの両親のために仏壇をプレゼントしてくれた。リヨは両親の写真をその中に大切そうに納め，２人で手を合わせた。お盆に近いある日，この物語は終わる。日系移民たちの差別の苦しみに焦点を当てた Yoshiko Uchida

の作品とは異なり，この作品は，日系移民の中の日々の生活に焦点を当てたものであった。映画の脚本ということもあり，あまり過激なテーマにせず，見るものに感動を与えるさわやかな結末である。

おわりに

今まで多くの日系アメリカ文学を研究してきた。時代の中であらゆる角度から日系人の生活が描写されてきた。今回はそんな中で，比較的扱われることの少ない「写真花嫁」をテーマにした作品を考察した。1世の女性の，「写真花嫁」として海を渡った女性の苦労なしには，日系移民の歴史は語ることはできない。最近研究を始めたKan Gotanndaの作品のように，1世をテーマとした作品も今後，さらに出版されていくことが予想される。新しい時代の作品だけではなく，日系アメリカ文学の原点を見直して行く事の大切さを改めて感じている。

特にYoshiko Uchidaの作品は，今までいくつか研究してきたが，彼女が残していったメッセージの重さを重く受け止め，今後も研究していきたい。

注

1）Yochiko Uchida, *Desert Exile:the Uprooting of a Japanese American Family*, Seattle, 1982. や Jeanne.W.Huston, *Farewell to Manzanar: A true Story of Japanese American Experience During and After the World War* Ⅱ *Interment*, Houghton, 1973. などが特に有名である。

2）当時，日本から渡米した男性の大半は，出稼ぎが目的であり，大金を得られたら日本に戻るつもりだった。そこで結婚しいるものは，妻子を日本に残すものが多く，また独身男性の渡米が多かった。

3）David Mura，*Turning Japanese*, Archor Books, New York，1991。

4）筆者はPhilip Kan Gotandaの脚本を入手し，又Gotanda氏の作品を翻訳している吉原豊司氏と情報交換をするチャンスを得て，多くの情報を元に2005年秋Philips Kan Gotandaの作品研究を行った。

5）筆者は2003年3月金城大学論文集第44号でUchida Yoshikoの作品を研究し，発表している。

6）Uchida Yoshikoの作品の引用は，中山庸子氏の訳を参考にしている。

7）キネ旬報社の『ピクチャーブライド』から引用している。

Work Cited

ウチダヨシコ，『写真花嫁』（中山庸子訳），東京，学芸書林，1987。Uchida Yoshiko, Picture Bride, California, University Of Washington paperback edition, 1997。

ウチダ・ヨシコ『荒野に追われた日々』，（波多野和夫訳），東京，岩坂書店，1985。

Uchida Yoshiko, Jorney to tpaz，Berkeley, Creative Art Book Company, 1971。

オカダ・ジョン，No No Boy（中山容訳），東京，晶文社，1979。

山本茂美，「ある日系アメリカ文学者のメッセージ」，金城大学論集，第44号，2003年。

山本茂美，「日系アメリカ文学における劇作家の意図について」，金城学院大学論集，人文科学編第1巻第1・2合併号，2005年3月。

David Mura, Turning Japanese, Archor Books, New York,1991。

Kayo Matano Hatta，Mari Matano Hatta，Hawaii, 1994

ハッタ・マタノ・カヨ，ハッタ・マタノ・マリ，『ピクチャーブライド』，東京，キネマ旬報社，1995。

Works Consulted

佐藤清人，「写真花嫁」と『写真花嫁』―事実と虚構の間で，山形大学紀要，第15巻第2号

田中　景，「20世紀初頭の日本・カリフォルニア「写真花嫁」修行―日本人移民女性のジェンダーとクラスの形成，社会科学，同志社大学人文科学研究所。

カドゥア・ドナルド，Picture Brides in Early Japanese Immigration to Canada，大阪樟蔭女子大学論集，第39号，2002年3月。

柳澤幾美，「写真花嫁」問題とは何だったのか―その説の形成を中心に，異文化コミュニケーション研究，愛知淑徳大学，6，2003年２月
ワタナベ・カヨコ，Yoshiko Uchida's Picture bride，東京成徳短期大学紀要，第34号，2001年３月。